

(1面から続く)

の仕方があることに、以前は気づいていませんでした。藤勝先生が言われていたアクティビティのシチュエーション(場面)の設定についても、意味のあるように、また、子どもたちが実際に使えるような形を考えるように努力しています。

○司会 「英語で英語を説明する」ことは子どもたちに理解できますか。

○加藤 私が思っていた以上に理解しています。1年生にイントロダクションで「self introduction」という言葉はどういう意味かを考えさせた時、英語でto tell my name(名前を伝えること)、to tell my hobby(趣味を伝えること)と続けていったら、「自己紹介だ!」と分かりました。彼らに分かる範囲の単語を使って気づかせるのには時間がかかりますが、できるだけ取り入れています。

○藤勝 私もそう思います。生徒からは「2年生の時のアクティビティと比べて自分が英語を話している感じがした」「周りのみんなが“英語”を話しているみたいだ」というアンケート結果も得られています。しかし、今年は受験を控えている3年生の担当なので、授業すべてを変えてしまうと生徒に負担がかかるため、できる範囲で変えている最中です。私も英語での説明を増やしていますが、本来やるべき、劇的に変えるべきと考えている段階の5~6割ぐらいです…。

○松本 研修後の授業では、子どもたちは結構やる気になっていました。英語がもともと好きな子や英語を習っている子が学年の中に多くいるので、刺激になったようです。英語をもっと使ってみたいとか、場面ごとの話し方などを積極的に聞いてくるようになりました。

○司会 授業中の生徒の反応で、特に変わったと思うことはありますか。

○松本 子どもたちは間違えてもあまり気にしなくなりましたね。間違えた生徒本人にも「トライしよう!」という気持ちが前面に出てきた感じがするので、「あいつ間違えてる!」みたいなクラスの反応は減った感じがします。

○加藤 帰国後の最初の授業が、中学2年生にオーストラリアに関する内容を教えることでした。撮影してきた動画などを見せて英語で説明したので、最初は「急に英語の量が増えたね」と生徒に言われました。生徒たちは驚きつつも、学期の最後には抵抗感はなくなっていたと思います。続けていけば子どもも慣れるのだと感じました。教師がどれだけ英語を使うかが勝負だと思います。

<「中学英語」でいろいろ話ができたら楽しいね>

○司会 “英会話は中学校で習う英語で十分”ということも聞きます。中学校で習う英語は基本中の基本なので、実用英語と言えますか。中学で英語を教えている先生は「中学英語」のレベルをどのようにとらえていますか。

○加藤 私は「中学校の英語が完全に理解できるようになれば、海外旅行に一人で行けるよ」と生徒に伝えています。初めて海外旅行に行った時、意外と簡単な単語と言い回しで十分通じた経験があり、生徒たちが英語を学ぶ意欲につながればと思うからです。

○藤勝 文法的には恐らく中学校レベルで問題ないと思いますが、中学校で学ぶ単語力では圧倒的にレベルは低いです。単語レベルを上げるには、ある程度のレベルの高い英文を読むとか、情報に触れ、多量の英語を聞くなりすることが必要です。そういう意味では高校なり大学レベルの英語をざっと勉強して読めるようになれば、結果的に、中学校レベルの英語の文法で話せることはあると思います。ですから、私は中学英語が全てというよりは、中学校レベルでは英語に興味を持たせたり、英語を通して自分の気持ちや経験を話すことに、もっと自分から“がつつ”行ってくれるといいなと思っています。

○松本 中学校レベルで十分なところはありますが、どこまでその人が必要になるかでかなり違うと思います。私は、英語が少なくとも嫌いにならないように、歌ったりテレビを観たりとか、英語に関する興味を引き伸ばしておくことが中学校の責務だと思うので、嫌だという気持ちだけは植えつけないようにしようと思っています。

<英語の習得は将来の夢につながる近道では…>

○司会 英語を習得できれば、将来の職業の選択がすごく広がると思いませんか。本市でも、中学2年生がキャリア教育の一環で、さまざまな事業所で三日間程度の社会体験を積んでいます。既に将来の職業を意識している子どももいると思いますが、英語の習得が将来につながるような話はされますか。

○藤勝 そういった話はよくします。英語を使う仕事というと、商社に入り海外で働くのが一般的なイメージですが、少子化で日本の市場が小さくなってきますから、海外に目を向けないと今の経済規模は維持できないという話もします。「将来、英語を使うような仕事はしない」という生徒もいますが、そういう生徒にも「そんなことを言っているのはだめだ!」ぐらいに強く言うてみることはあります。しかし、「自分は英語はできないから人生は終わりだ」と思い詰めるのはまったく逆の効果なので、もちろん加減しながらですが、「どの仕事に就いても、恐らく今後は英語をある程度使うようにならないと、アジア圏ですら交渉する場面でも同等な立場には立てないよ」と話しています。

<あなたが思う中学校のprofessionalな英語教師とは…>

○司会 「プロフェッショナル」という番組がありますが、先生方が思われる英語の教師としてのprofessionalプロフェッショナルとはどういうものですか。今回の研修に参加した感想も交えて教えてください。

○藤勝 扉のドアを開けて、「向こうにはこんなことがあるよ」と繰り返し伝えられる人だと思います。教師としてもそうですし、英語を通じて、こういう世界が待っているよと言ってあげる。中学校3年間の英語の授業は週に4コマしかなく、完全に話せるようになるのは相当厳しいことです。中学生ですから、ほかの教科も勉強する時間が必要です。「ある程度英語を使えるようになる」という世界があるよ。だから、このまま英語を続けると可能性がもっと広がるよ」という種を蒔いて、「じゃあね、これで中学校の英語は卒業!この先は次のステージで身に付けるんだよ」みたいなイメージです。自分も学校以外で勉強したことのほうが圧倒的に多かったですから、プロになった人、なれる人というのは全員そうだと思うのですが、学校教育機関以外でも相当努力したことに比例すると思います。

研修では英語の指導法を勉強させてもらったほか、研修先の大学が提供していたボラ

ンティアプログラムにも参加しました。ロサンゼルススキッド・ロウという治安の悪い地域のホームレスに食料を配ったり、フードバンクという、食料を段ボールに詰めて低所得の人に配る活動なども2、3回やりました。今回の研修で手に入れた技術なり何なりを使って、英語だけでなくこういったいろいろなことも伝えていきたいと思えます。

○加藤 プロの教員とはエンターテイナーで、リーダーで、その子どもを支えてあげられる親でもあり、一度に何役もこなせる人だと思います。そして、藤勝先生が言われたように、英語の世界の扉を開けてあげられるようなプレゼンターだと思います。今回の研修で「百聞は一見にしかず」だと、改めて実感しました。実際に英語がどういう場面で使われているかを見聞きできたことが、とても勉強になりました。大学での授業ももちろんですが、ホストファミリーとの何げない会話で、「おやすみ」は本当にGood nightと言っているとか、「行ってきます」の挨拶はGood byeではなく、Have a nice dayを使うとか、そういう実際の英語を体感できたことが参考になりました。

○松本 研修を受けたことで、授業の中で変えていかなければならないところもあれば変えなくてよかったところもあり、これで良かったんだという自信ができました。研修の成果としては都内の英語の先生方との横のつながりができたのが一番大きく、どのように授業をしているのか等の情報交換をしています。海外の学校がどうしているのかを知るのも大事ですが、日本の学校で教えている他の英語の先生はどのように教えているのかを知ることができたのが一番大きかったのも、せっかくできた輪を切らないようにします。私は、英語ができるためには日本のことや日本語について、さらに日本人である自分たちのことをよく知る必要があると思います。自分を知る、日本語を知る、その知識を、英語を使って発信していく力を生徒に身に付けさせることが最終的に自分たちが行き着くところ、プロの英語教師であると思えます。

中学生のお姉さん、お兄さんたちに続きます…

小学校に外国人ALT(外国語補助指導員)が配置されました



今年度から、小学校5・6年生の外国語活動に、英語を母国語とする外国人ALT(Assistant Language Teacher)を配置しています。外国人ALTと外国語活動を行うことで、子どもたちは生きた英語を学ぶとともに、異文化理解も進めています。昨年度までは5・6年生も外国語(英語)活動には、英語活動支援員として英語の得意な方に指導補助をお願いしていました。多くは日本人の方でしたが、今は外国人の方です。市内の小学校の外国語活動の授業を見学しました。

子どもたちに感想を聞くと、「(授業中は)ほとんど英語なので外国感満載!」「相手の誕生日を聞く言い方を習ったので、家で使ってみよう」とのことでした。本市の小学校では、学習指導要領で必修になっている小学校5・6年生での外国語活動のほか、1年生から4年生でも年間8時間程度、英語活動を行っています。

なお、1年生から4年生までは、英語活動の導入時期ということから、今までどおり日本語も分かる英語活動支援員を配置し、無理なく、楽しい感じで授業が受けられる工夫をしています。

■編集後記■ 今号では、「公立学校の英語教育」を考える上で欠かせない「英語教師」に注目しました。多くの児童・生徒は主に「授業で」、英語を学んでいるからです。他の教科の教師もそうですが、英語教師にも“学び直し”が求められています。個人の努力で勉強を続けるのはもちろん、今回のような派遣研修による場合があります。派遣研修は1回目が始まったばかりですが、2回、3回と続くことによって、研修に行かれた方の経験が他の教員に広く影響を与え、授業力が高まっていくことに大きな効果が期待できると思えました。生徒たちも先生の変化に気がついてい

対談中、話を伺った先生たちから、「変わらなければ!」という意識の強さをひしひしと感じました。



東京都教育委員会から、「特別支援教室の導入ガイドライン」が示されました。小学校の通常の学級に在籍している発達障害や情緒障害のある児童は、これまでは情緒障害等通級指導学級が設置された学校に通っていましたが、在籍校で専門的な指導が受けられるようになり、平成28年度から順次、各小学校に特別支援教室が設置され、専門の教員が巡回指導を行います。巡回指導教員と在籍校の教員が協働して児童の困難さを効果的に改善できるとともに、一人でも多くの児童が困難さの状況に応じた指導を在籍校で受けられることとなります。市教育委員会においても、「東久留米市特別支援教室設置検討委員会」を設置し、本市の実情を踏まえて、特別支援教室の設置について検討していきます。

特別支援教室の設置に向けて検討していきます

市立小学校給食調理業務委託推進計画を策定しました

東久留米市の小学校給食では、平成22年度から民間業者による調理業務委託が順次導入されています。平成27年度からは、第二小学校でも給食調理業務委託が始まって、五つの小学校が民間業者による調理体制になりました。

この先も給食の安全・安心を継続していくために、平成27年3月「東久留米市立小学校給食調理業務委託推進計画」(計画期間は平成27年度~32年度)を策定しました(計画書は学務課及び市のホームページ等でご覧いただけます)。詳しくは学務課保健給食係☎470・7779へ。

